

## 序 ヤコブソンの生涯

### モスクワ時代（一九一〇年代）

ラザレフ東洋語研究院付属ギムナジウムからモスクワ大学へ

ロマン・オーシポヴィチ・ヤコブソンは一八九六年十月十一日、裕福なユダヤ人家庭の長男として生まれた。幼少のころより諺や数え歌に興味を示していた未来の言語学者は、一九〇六年にラザレフ東洋語学院付属ギムナジウムに入学したが、十歳にしてロシア語の六つの格の意味のリストを作成することに熱中していたのだという。この試みはヤコブソンの文法研究の中でも、ロシア語動詞の文法カテゴリーの分析とならんで評価の高い論文「一般格理論への寄与——ロシア語の格の一般的意味」に直結している訳ではなからうが、恐るべき早熟ぶりである。

ヤコブソンのフランス語の教師は翻訳家、イタリア未来派の紹介者としても知られていたゲンリ

フ・タステヴェンであったが、ロシア語とフランス語のバイリンガルである生徒に今さら語学の授業をする必要はなからうと、マラルメの詩の分析や翻訳といった課題を与えた。ただの優等生ではないと見てのことだろう。実際、ヤコブソンは十代の頃から、ロシア未来派の詩に関心をもっており、最初のモノグラフをささげたフレブニコフ (Velimir Khebnikov, 1885-1922) をはじめ、マヤコフスキー (Vladimir Majakovskij, 1893-1930) 、クルチョーマイフ (Aleksij Kručenyx, 1886-1968) のような未来派の詩人たちと親しく交わっていた。彼の生涯のテーマ「音と意味」の原点は、少年時代に芽生えたこの関心にある。音と意味の関係が自動化されておらず、尖鋭に感知される前衛詩への関心が、彼を言語学者にしたといっても過言ではない。

ギムナジウム時代には、彼自身も音声面だけに焦点を当てた実験的な〈ザーウミ〉の詩を——「ド  
ウイル ブール シチル」というクルチョーマイフの詩行がその代名詞となった、指示対象をもたない語であるザーウミを駆使した詩作を——試みていた。クルチョーマイフのザーウミ詩と立体未来派の画家オリガ・ローザノワのリノカット版画を組み合わせた限定本『ザーウミの腐本』<sup>ズルガ</sup>の巻末に、十代の頃に書いたヤコブソンのザーウミ詩が一編掲載されている。しかし、ヤコブソンの理解によれば、ザーウミは、一般に考えられていたのとは異なり、意味をもたない語ではなく、あたかも自身の音列にふさわしい意味を求めているかのような語なのであり、こうした理解からも、ヤコブソンが、原理主義的なフォルマリズムとも、アメリカの記述言語学ともちがって、意味を決して等閑視していないことが——音と意味との関係にこそ彼の関心が存することが——うかがい知れる。

そんなヤコブソンが誰よりも高く評価していた詩人が、当代最高の言語実験の実践者にして理論家

であったフレブニコフだったのは当然といえば当然だろう。一九一九年の早春から、二人は二巻からなる『フレブニコフ選集』の出版準備にあたっていた。詩人と「十八世紀に書き留められた、さまざまな宗派の異言や呪文が織りなすテクスチャの内的法則についてあれこれ議論した」というのだが、年下の協力者から教えられた、古文書に記録されている常民たちのまったくノンセンスに思われる呪文が、自分の詩に似ていることに驚いたフレブニコフは、自作の詩「ガリツィアの夜」の中にその呪文を取り込んだとこう [Jangfeldt 1992, 19]。

この頃、二人はしじゅう会っていたが、ある日、ヤコブソンのマンションで語り合っているうち、つい居眠りしてしまったヤコブソンが目覚ましてみると、フレブニコフの姿はもうない[4]。そのままモスクワから姿を消した詩人は、二度と首都に戻ることはなかった。結局、『フレブニコフ選集』は刊行されずじまいに終わり、ヤコブソンの準備した長い序論は、宙ぶらりんになった。これが、その後に移り住んだブラハで一九二一年に刊行され、フォルマリズム時代のヤコブソンの代表作として知られるようになった『最新ロシア詩——素描一』(Novejšaja russkaja poezija. Nabrosok pervyj, 1921)である。

モスクワ時代のヤコブソンの交際相手は、詩人や言語学者、文学研究者にとどまらなかった。一九一三年には、ロシア・アヴァンギャルドを代表する画家で、当時三十代半ばだったマレーヴィチ

\* 未来主義者の詩集らしく、表紙にはあえて一九一六年という未来の年記が印刷されていたが、実際に刊行されたのは一九一五年だった。

(Kazimir Malevič, 1878-1935) が、まだギムナジウムの生徒だったヤコブソンを、わざわざ自宅まで訪ねて来たことがあった。それはちょうど、画家が抽象的（幾何学的）なものと具象的なものが画面に共存している《クボ＝フトウリズム（立体＝未来主義）》から、無対象絵画を主張する《スプレマティズム（絶対主義）》への移行を構想していた時期に当たる。すでに名を成していたマレーヴィチは、マンシヨンの子供部屋で十七歳になるやならずの少年に向かつて、自身が具象画から描写の対象をもたない純粹な抽象画、いわゆる「無対象絵画」へと徐々に移行してきた経緯を語った。意味をもたない詩だと考えられていた——音声だけの詩のように思われがちな——《ザールミ詩》にあつてこそ、かえって音と意味とのつながりが前景化する、というヤコブソンの問題意識と通底する議論に、つまり、指示対象をもたない抽象絵画における意味的要素についての議論に、二人は熱中した。話し合いの最後にマレーヴィチは「いま新作の非具象画を描いているんで、今度の夏、いっしょにパリに行こう。君なら講演ができるし、新作についての解説もできる」と誘った。画家はフランス語が話せず、少年はフランス語に堪能だったということがあるにしても、理論家としてはマレーヴィチ自身より自分の方に信を置いてくれていたからだ、と晩年のヤコブソンは自負を込めて回想している〔23〕。

### 盟友たちとの出会い

一九一四年、ヤコブソンはモスクワ大学歴史文献学部のスラヴ・ロシア学科に入学した。大学ではモスクワ言語学派の創立者、フィリップ・フォルトゥナートフの遺産ともいえる厳密な歴史言語学を学ぶ一方で、構造主義言語学の創始者としてソシュール (Ferdinand de Saussure, 1857-1913) と並び称

されるボードゥアン・ド・クルトネ (Jan Niecisław Baudouin de Courtenay, 1845-1929) の学統を受け継ぐ、レフ・シチュエルバ (Lev Ščerba, 1880-1944) の著作にも接していた。ジュネーヴに亡命し、ソシュールの直弟子のシャルル・バイイやアルベール・セシュエやバイイに学んだカルツェフスキー (Sergej Karcevskij, 1884-1995) が、一九一七年に帰国した際にロシアに紹介したソシュールの言語思想は、ヤコブソンに、記号の体系としての言語という見方に確信を抱かせてくれた。ソシュール流の体系的思考が、幼少期から育んできた音と意味の結びつきへの関心に加味されたお陰で、ヤコブソンは、意味の違いを担わない〈音声〉と意味の差を担う〈音韻〉とを区別する音韻論の提起へと、さらには全ての言語記号は音と意味の統一体である、との記号論的な主張へと進んでいったのだろう。

モスクワ大学に入学した直後の一九一四年の八月、ヤコブソンは終生の友と——後にブラハ言語学サークルのメンバーとして構造主義的なフォークロア研究の開拓者として優れた業績を残すことになるボガトウイリョフ (Petr Bogatyrev, 1893-1971) と——知り合う。新学期の科目登録のため、行列に並んでいた時に言葉を交わしたのがきっかけだった。「不思議かもしれないが、話はすぐ二人の思い描いている未来の研究ばかりになった。共同でフォークロアと方言学のフィールドワークに行こうと誘われ、実際、その数カ月後にモスクワ県ウレヤ郡で調査をした」[VII, 293-304]とヤコブソンは述懐している。

### モスクワ言語学サークルの結成

翌一九一五年三月には、方言委員会と共に活動したモスクワ大学の七名の学生によってサークルが

成された。これが後世名高い《モスクワ言語学サークル》である。この私的な学生サークルは、精神的な研究活動によって、ドミートリー・ウシャコフらドウルノヴォ (Nikolaj Durnovo, 1876-1937) ら、年長世代の研究者の注目を集め、一九一八年の秋には法人格を認められた。教育人民委員部・学術総局のネットワークに組み込まれ、国庫より助成金を得られるようになったのである。

当初の主な活動は、モスクワ州の方言とフォークロアの調査研究だった。当時のロシアでは、方言学やフォークロア研究への関心が高まっていたらしい。言語学の多くの分野においては、いまだ通時的研究への偏重が強かったのに対し、方言という生きたことばの研究は、おのずと共時的な研究を促したのだろう。しかも、柳田國男の『蝸牛考』で知られているように、方言には言語の歴史的变化が反映されており、ソシユールの共時態と静態、通時態と動態の同一視に対するヤコブソンの異議があった。この頃、ヤコブソンをはじめとするフォルマリストの何人かが、「詩の方言学」であるとか「詩的言語を一種の方言として研究する」という言い回しを用いていたという事実からしても、後にヤコブソンが〈下位コード〉という概念を提起することで一枚岩と見なされていた言語体系にある種のダイナミズムを持ち込む契機が、モスクワ言語学サークルでの方言調査にはあった。

だがその一方で、一九一五年の調査の際、ヤコブソンたちは、ある口さがない女性のせいでドイツ人スパイの濡れ衣を着せられるという嫌な経験をした。時あたかも、第一次大戦の真っ最中、オーストリア、ドイツと交戦中だった。まず女性たちがこのデマに飛びつき、次第に村中が根も葉もない噂を真に受けるようになった。その後の人生で、ヤコブソンは何度もスパイの嫌疑をかけられることに

なるのだが、これがその始まりであった。

懷や脇の下に毒の入った小瓶が隠してあるのではないかと疑った男たちが、私たちの身体検査をした。身分証も偽造だと決めつけられ、眼鏡をかけているのがドイツ人の証拠だと見なされた。さらに人だかりが増え、前からいた人々が、正体を暴かれた三人の「ドイツ野郎」について、いよいよ手の込んだ奇想天外な話をして聞かせた。

[IV, 644]

モスクワ言語学サークルが結成された翌年には、ペトログラードで、文芸学者のトゥイニャノフ(Jurij Tynjanov, 1894-1943)やヴィクトル・シクロフスキーたちによつて、「オボヤズ」という略称でひろく知られる《詩的言語研究会》が結成された。モスクワ在住ながらヤコブソンもメンバーに選ばれ、トゥイニャノフやシクロフスキーたちとの交流を深めていった。後にオボヤズとモスクワ言語学サークルがとつた革新的なアプローチは、《ロシア・フォルマリズム》として知られるようになったことは、周知の通りである。

ヤコブソンの元々の関心が詩にあったこと、オボヤズの文学研究者との交流、モスクワ言語学派においてもフォークロア研究に力点が置かれていたこと、さらには言語研究において青年文法学派の影響から脱しきるにはまだ周囲の抵抗が強かったことなどの事情があったのだろう、この時期にいわゆる「構造主義的」方法の萌芽が最初に認められた分野は、詩学であった。ロシアにおける言語研究の伝統においても、ヤコブソン個人にあつても、詩学は言語学と並ぶ大きな柱だったのである。

ロシア時代のヤコブソンの代表作といえ、何をおいても『最新ロシア詩』であろう。出版されたのこそ一九二一年のプラハであったが、既述の通り、フレブニコフ選集の序文として構想され、モスクワ言語学サークルとオボヤズでの研究発表をまとめたものであり、一九一九年春には脱稿していた。

詩作品の音構造と意味面とが他のどの詩人よりも堅固に結びついているフレブニコフの詩的手法を理解するには、シチュエルバやポリワノフが、その師であるボードウアン・ド・クルトネの言語理論を継承し、音と意味との結合の上に打ちたてた音素の概念が——語のような有意味単位が持つ知的意味の区別に役立つ音韻論上の最小の弁別単位としての〈音素〉が——有効であることが明らかになった、とヤコブソンは述懐する。『最新ロシア詩』の「好音調ナフイナが操作するのは、音声ではなく音素、すなわち、意味的表象と連合することのできる音響的表象なのである」〔V, 336〕という一節からは、ヤコブソンの中で音素の概念がある程度は明確になっていたことが読みとれそうだ。

しかし、正真正銘、音韻論的な分析が現われるのは、『チェコ詩について——特にロシア詩と比較して』(O českém slize, přemluštěstvenno v srovnání s ruským, 1923) においてであった。その比較韻律論の基礎には、徐々に形をなしつつあった音韻論が据えられていたのである。概念的意味の区別にかかわる「有意味な」〈音韻(音素)〉と知的意味の区別に参与しない「非文法的な」要素、すなわち〈音声〉とが区別された上で、詩的言語においては、非文法的要素の独自の組織化オルガニゼイションが特徴的であると指摘する一方で、日常言語で音韻論的要素がデフォルメされるのは話し手が発話の意味に無関心的な場合に限り、と述べている。この指摘を裏返して言えば、伝達をもつぱらとする日常言語をデフォルメすることが、表現の陳腐化から救い出す手段であるにしても、そうした美的機能を果たすため



のデフォルメが意味を弁別する機能を損なうことがあってはならず、従ってデフォルメが音韻的要素に及ぶことはないという発想が、その前提となっていた。

『チェコ詩について』の企図は、「言語における音韻的要素と非音韻的要素を厳密な方法によって選り分け、そのような位置づけをもつ要素が韻律を創造する基礎となるかについて一般法則を発見すること」にあった〔山中『詩とことば』、九七頁〕。ヤコブソンの業績の中で、言語学史上、最も重要なものとして評価されている音韻論の確立が、比較韻律論から始まったのは意外かもしれないが、詩学こそが彼の言語理論の原点であり、「ことばの外的、音声的な面と内的な面、すなわち意味の領域との問題は、詩的言語においてとりわけ明らかにする」〔VIII, 455〕との確信に基づいていた。

#### チェコスロヴァキア時代（一九二〇—三〇年代）

ヤコブソンがチェコスロヴァキアに到着したのは一九二〇年七月のことで、ロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国（いわゆる「ソヴィエト・ロシア」の）外交使節団の一員としてだった。当局はモスクワ大学在学中にチェコ語を学んでいたヤコブソンの秀でた語学力を見込み、ロシア人捕虜の送還にあたるソ連赤十字使節団の通訳官として派遣したのである。

当時、自由主義圏に属していたチェコスロヴァキアでは、一九一七年のロシア革命によって樹立されたソヴィエト政権の使節団に対しては、当然ながら猜疑の目が向けられていた。ヤコブソンにしても、ほとんど「ペルソナ・ノングラータ」と見なされていたらしい。一九二〇年の秋から二一年春に

かけての学期に、彼はカレル（ブラハ・チェコ）大学に通い、オールドジフ・フイエール教授にチェコ語史、エミル・スメターンカ教授に古代チェコ文学、講師のトラウヴニーチェク（František Travníček, 1881-1961）にチェコ語学を、というように当代一流の教授陣から指導を受けていた。しかし、右派メディアは、ヤコブソンが大学に通う真の目的が諜報活動にあるのではないかと疑い、攻撃した。こうした厄介な状況については、幼なじみで片想いの相手でもあったエルザ・トリオレ——マヤコフスキーの恋人として有名なリリーヤ・ブリークの妹で、ルイ・アラゴンの妻として紹介されることが多いが、一流の作家であったエルザ——との間で一九二〇年代に交わされた書簡に語られており、「蛇」、「詐欺師」、「ろくでなし」と自分を罵る保守派の新聞雑誌について皮肉まじりに言及している。

ブラハ・チェコ大学に聴講生として残りたいというヤコブソンの希望は、教授会の推薦を得られず、叶わなかった。致し方なくドイツ語で教育を行っていたブラハ・ドイツ大学に籍を移し、スピナ教授（Franz Spina, 1868-1938）にチェコ語の指導を受けることになったが、スピナは研究者というよりは、ズデーテン地方の右派政党《ドイツ人農民党》の党首として知られる存在だった。

スパイ嫌疑は、一九三九年にチェコスロヴァキアを出国するまで、ヤコブソンを苦しめた。彼と共にブラハ言語学サークルを立ち上げたカレル大学のマテジウス教授や、マサリク大統領からは全幅の信頼を寄せられていたが、そのマサリクから亡命ロシア人支援の実務面を任されていたヨセフ・ギルサ（一九二一年から三一年まで在ソ・チェコスロヴァキア全権代表）や亡命ロシア人の支援に私財を投じたカレル・クラマーシュ（一九一八年から一九九年まで首相）のような政府要人までもが、ヤコブソンはソ連のスパイだ、と公言して憚らなかつた。

わずか数カ月で赤十字使節団の通訳の職を辞した後、ヤコブソンは《在チェコスロヴァキア通商代表部》の広報担当官の職を得た。一九二七年九月には、共産党員ではないとの理由で解任する旨の決定が、ソ連共産党中央委員会書記局によって下されたが、なぜか翌二八年の十二月まで勤務を続けることができた。さすがに退職の前月には最後通牒を突きつけられ、ソ連への帰国を促されたが、ヤコブソンはこれを拒否した。

異郷の地で失業したヤコブソンに救いの手を差し伸べたのは、プラハ・ドイツ大学での指導教授だったスピナだった。自身が創刊者の一人であったドイツ語誌『スラヴ評論』の編集部に推薦してくれたのである。お陰で収入が確保されたのみならず、発表の場を得ることもできた。深い友情を育んでいたマヤコフスキーの拳銃自殺を——ヤコブソン一家が住んでいたのと同じ建物にあり、ヤコブソンの口ききで借りた部屋で遺体が発見された事件を——受けて書かれた、哀切をきわめる「詩人たちを浪費した世代」の初出も、出色のパステルナーク論として知られる「詩人パステルナークの散文に関する覚書」の初出も、この『スラヴ評論』だった。

もはやヤコブソンに帰国の意志がなかったことは、「詩人たちを浪費した世代」を一読すれば明らかだし、帰国しなかったお陰で命拾いしたこと、モスクワ大学時代の恩師ドゥルノヴォのソ連帰国後の運命を思えば明らかだった。

ニコライ・ドゥルノヴォは、一九一八年から二一年までサラトフ大学教授の座にあったが、沿ヴォルガ地方を襲った大飢饉のため健康を害してモスクワに戻り、その後の三年間は定職につけずにいた。窮状を見かねたヤコブソンの勧めで、ドゥルノヴォは四カ月の予定でチェコスロヴァキアへの研究出